

# 琉球大学学術リポジトリ

生活文化としての和服の理解に関する研究 — 「被服構成実習3」におけるゆかた製作を通して—

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部附属教育実践研究指導センター 公開日: 2008-11-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤原, 綾子, Fujiwara, Ayako メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/8162">http://hdl.handle.net/20.500.12000/8162</a>

## 生活文化としての和服の理解に関する研究

— 「被服構成実習Ⅲ」におけるゆかた製作を通して—

藤原綾子\*

(1997年9月30日受理)

A study of understanding of Japanese clothes as Culture of life.  
— Through sewing of Yukata in “Clothing construction III.” —

Ayako FUJIWARA

生活文化としての和服を理解させるため、「被服構成実習Ⅲ」の授業を通して以下に示す実践を試みた。大学生男女を対象とした和服のイメージ調査、「被服構成実習Ⅲ」の実習前後の和服に関する基礎知識の理解度、和服の製作、着用経験及び着用能力の調査、家庭科教育における和服製作に関する意識調査、実習後の感想等、更に近年相次いで出版されている浴衣（ゆかた）の入門書について分析し、授業用参考書としての考察を行った結果、以下のことが明らかとなった。

1. 大学生の和服に対するイメージは祝、祭、行事など特別な時の衣服であり、しとやか、優美・優雅、日本的な印象を感じている。又どちらかと言うと晴着であり、着装は困難で非活動的、非経済的、古典的というマイナスイメージを持っていることが明らかになった。
2. 和服に関する基礎的知識の理解では、実習前は低い正答率しか得られなかったが、実習後はるかに高い正答率が得られ、製作実習がその理解に役立っていることが明らかになった。
3. 家庭科教育における和服の製作をどういう教育段階に入れるべきかについては、40%の学生は高等学校家庭科で必要であると回答し、全体の半数（50%）の学生は大学教育に必要であると回答していた。
4. 実習後の学生の感想から、ミシン縫いを取り入れたため目標の日程（一週間）で仕上げる事ができた、和服はほどくと長方形の布地になりリフォームしやすく経済的であること、着つけを学ぶことができ将来役に立つこと等、和服の長所を実習から学んでいて、充分ではないものの和服理解の一端は得られたと考える。
5. 近年相次いで発行されているゆかたの入門書を検討した所、数冊の本では身長によるL、M、Sの三体型のでき上がり寸法表示があったものの、L、Mだけの本もみられた。製作手順についても従来からの方法もあれば、大幅に変化したものも見られた。肩当、居敷当はほとんどの本で省略されていた。製作方法は従来の手縫いのみからミシン縫いを取り入れた方法に移向し、時間の短縮化がはかられている。教員養成課程家政専攻の学生のための参考書としては一応使えるものの、肩当、居敷当のつけ方等は加える必要がある。

\*琉球大学教育学部

## 1 はじめに

近年、全般的に和服の消費は低迷の傾向にあるが、ゆかたは若者に人気がでている。ゆかたの用途は、営業用（旅館、病院等）を除くと、従来、祭・盆踊り等が主であったが、今や野外コンサート、野球・サッカー観戦等若者にとって夏の外出着として定着してきた<sup>1)</sup>。

色についても一昔前は、白と藍が定番であったが、高度経済成長期の昭和40年代以降、模様部分に赤、紫、青、黄色等の有彩色が入り徐々に華やかになり、最近では地色そのものが白藍以外の色になり、それにさまざまな有彩色の柄が入り、従来のようなすっきりした清涼感はない。柄についても伝統的な季節感を表わす柄は消え、大胆で洋服感覚の柄が主流になっている<sup>2)</sup>。

素材についてもこれまでゆかたと言うと木綿地というのが定義になっていたが、一昨年初めてポリエステルの新素材が<sup>3)</sup>つくられ、昨年はその改良型（凹凸のある揚柳織）、又形態安定加工をうたった物もでて多様化の様相を呈している。これらの新素材は、吸湿性があり、かつ木綿の欠点であるしわになりやすい、乾きにくい等の性質を改良してあり、従来の木綿のものに比べて肌ざわりの良さ、手入れの簡便性を売り物にしている。

このように若者の心をとらえた浴衣ではあるが、その製作となるとむづかしい、時間がかかる等を理由に手作りしている人は少ない。こうした傾向を反映して既製ゆかたも以前から市場に出まわっているが、筆者が調べたところ、サイズ、色柄、製法等消費者の多様な要求に未だ対応できていないように思われる。また近年のゆかたブームを反映してか、初心者向けのゆかた入門書（縫製と着つけを掲載）が目立っている。これらの入門書は、着つけと縫製が写真と図で示され、初心者向けになっているが、その詳細について未だ学問的検討は行われていない。ゆかたに関する研究については、昔は製作、布地等多面的な研究が行われていたが、近年手づくりする人が減っているせいか減少している。

平成一年以降、学会誌の衣服関係を見ると、ゆかた地の材料学的研究<sup>4) 5) 6)</sup>は見られるが、我国の伝統文化として位置づけた研究<sup>7)</sup>は少ないように思われる。

本研究は①和服に関する基礎的知識の理解、②適当な製作時間、③和服に対する関心と生活への活用（自分で着装する）等を目的に選択科目「被服構成実習Ⅲ」の中で実践を試みた。加えて最近のゆかたの入門書についても検討し、授業用参考書としての考察を行ったので報告する。

## 2 「被服構成実習Ⅲ」の目標・内容等について

琉球大学教員養成課程家政教育における被服領域では、2学年で「被服構成実習Ⅰ」（基礎縫い、作業着の製作）を小学校及び中学校教員養成課程の学生ともに必修として課している。3学年前期で「被服構成実習Ⅱ」を中学校教員養成課程の学生に必修としている。上記Ⅰ、Ⅱとも洋裁であり「被服構成実習Ⅲ」は家政専攻・専修生とも選択科目で、和服の一つとしてゆかた（女物）を実習題材にしている。目標や授業内容については学部発行の授業案内に載せている。その一例を表1に示した。その中で履修条件を「被服構成実習Ⅰ」だけとしているが、その理由は実習Ⅰだけを履修している小学校教員養成課程の学生にも履修することができるよう門戸をひろげているためである。平成6年度は前期一般の科目と同様4～9月の半年間の開講としたが、6ヶ月も布を持ち歩いていると印が消えたり、途中で意欲が失われたりする傾向がみられたので、平成7年以降は夏季休暇中の集中実習としミシン縫いを取り入れて製作時間の短縮化をはかっている。平成6～9年でのべ20人が受講している。以下に授業の流れを説明する。実習に先だって和服についての話、製作用具、布地等の説明をし、その次にこれまでの家庭科教育においての和服製作経験、着用経験と着用能力を調査する。更に和服についての基礎的知識の簡単な試験を実施する。実習に入り

表1 「被服構成実習Ⅲ」の授業計画

科目名(単位) 被服構成実習Ⅲ (1単位)	科目番号: 家305
担当教官: 藤原綾子	開設学期: 平成8年前学期
<p>授業内容: 和服は長い歴史のなかで日本の気候風土に合うよう工夫された構造で、材料も麻、絹、木綿という身近な植物、動物を利用してきた。その裁断や縫製には日本人特有の日本的価値観が反映されている。本実習では和服の一例として浴衣(ゆかた)を取り上げ、その製作をとおして和服の特徴を理解する。</p>	
<p>評価: 製作品, 製作記録ノート, 試験, 出席状況など</p>	
<p>教科書: 特になし</p>	
<p>参考書: 「ミシンで縫うゆかた」 NHK婦人百科 平成3年6月号  「ミシンで挑戦 手作りゆかた」 オレンジページ 1995年増刊号  「家族みんなの手作りゆかた」 主婦と生活社 1996年</p>	
<p>履修条件: 「被服構成実習Ⅰ」を履修済みのこと</p>	
<p>授業予定: 1 和服の歴史 和服の種類と用途  2 和裁用具の取り扱い 製作の準備  3~13 浴衣の製作  14 浴衣の着付け  15 和服に関する知識の理解(試験)</p>	

第一回目には自分の反物の布幅と総丈を計測、自分の体の採寸箇所の採寸をして、各自の仕立て上がり寸法表(表2)に記入させる。製作実習終了後、着つけ(平成7、9年度実施)とた

たみ方の実習をし、9月初めに和服に関する基礎知識の試験(実習前に実施したものと同一)を実施している。実習記録(感想を含む)と仕立て上がり寸法表は9月初めに提出させている。

表2 浴衣（女物ひとえ長着）仕上り寸法表

各部 名称	寸法の割り出し方	範囲	本人
袖 丈	$(\text{身丈} \div 3) - (4 \sim 5 \text{ cm})$	45~55	
袖 付		21~23	
袖 口	若い人 21 大人 22~23	21~23	
袖 幅	$(\text{ゆき} \div 2) + 1$	31~33	
身 丈	身長とほぼ同寸		
肩 幅	ゆき - 袖幅	30~32	
前 腰 幅	$(\text{腰囲} \div 2) - 7$ (前後差)		
前 幅	前腰幅 - おくみ幅		
後 幅	ゆき - 袖幅		
衤 (おくみ) 幅		15~16	
合 妻 幅		12~13.5	
身 八 つ 口	体型で決める	13~15	
衤 (おくみ) 下り		21~23	
衤 肩 あ き	首のつけ根囲の大きい人は多くとる	8.5~9.5	
衤 幅		5.5~6	
(狭衤・棒衤)			
く り こ し		2~3	
袖 の 丸 み	若い人	5~10	
	年寄	2~5	

採寸 身長：\_\_\_\_\_ 本人の反物  
 ゆき：\_\_\_\_\_ 布 幅 \_\_\_\_\_  
 腰囲：\_\_\_\_\_ 総 丈 \_\_\_\_\_

学生番号 \_\_\_\_\_ 氏名 \_\_\_\_\_

### 3 研究方法

#### 3.1 和服のイメージ調査

和服から連想するイメージを自由記述（2つまで）と対語の中から選択するという二つの方法で行った<sup>9)</sup>。その調査票を表3に示す。対象

は大学生男女53人（男子23人、女子30人）で、琉球大学教育学部3年次学生とした（3年次終了時点で調査）。3年次を選定した理由としては成人式を経験しているからである。

表3 和服に関するイメージ調査

A 和服から連想するイメージを自由に記述して下さい（2つまで）	B 和服から連想するイメージを下にかけた対語の中から選択して下さい（○をつける）
	晴着——————日常着 着装は容易——————着装は困難 活動的——————非活動的 経済的——————非経済的 現代的——————古典的

#### 3.2 和服製作経験、和服着用経験及び着用能力の調査 和服に関する基礎的知識の理解（試験）

「被服構成実習Ⅲ」の受講生（20人）を対象に中学校及び高等学校家庭科教育の中で和服製作経験、高校入学以降における和服着用経験及びどの程度着る能力があるのかを調査した。こ

こで言う着る能力とは自分の力で着る能力のことである。実習に入る前に和服に関する基礎的知識の理解を知る目的で、これに関する簡単な試験を実施した。それを表4に示す。この試験は実習終了後にも行ない、実習前後の結果を比較した。

表4 和服（女物ひとえ長着）に関する基礎知識（試験）

1 和服の一例として女物ひとえ長着について下の図に形を示した部分の名称を（ ）内に記入しなさい。

形と各部の名称

2 着尺用反物（一反）の幅と長さを記入しなさい。

3 浴衣（女物ひとえ長着）を製作する時、必要な採寸箇所を3つあげなさい。

### 3. 3 家庭科教育における和服製作の必要性

家庭科教育における和服製作の必要性をどのレベルで取り入れるべきかを授業の受講生を対象に調査をした。

### 3. 4 実習終了後の実習記録（感想）の分析

「被服構成実習」ではどの実習においても実習終了後にまとめる意味で実習記録を提出させているが、今回も実施した。その中の感想を分析し和服についての関心や特徴の理解度を考察する。

### 3. 5 ゆかたの入門書の検討

近年相次いで出版されているゆかたの入門書を手し、多様な体型に対応する仕立て上がり寸法、製作手順や方法、必要な箇所等の正統な仕立てという視点からこれらの本を検討し、授業用参考書としての可能性をさぐった。

## 4 結果及び考察

### 4. 1 和服のイメージ

和服から連想するイメージ、自由記述（2つまで）の結果を表5、6に示した。自由記述で上げられた言葉は名詞と形容詞で、表では分けて記載した。

表5 和服から連想するイメージ（大学生男子）

名 詞			形 容 詞		
昔の衣服	9 人	19.6 %	日本的な	7 人	15.2 %
祭・盆踊り	6	13.0	優美・優雅な	7	15.2
時代劇	5	10.9	しとやかな	6	13.0
成人式	2	4.3	上品な	3	6.6
正装	1	2.2			
	23 人	50 %		23 人	50 %

表6 和服から連想するイメージ（大学生女子）

名 詞			形 容 詞		
特別な衣服	5 人	8.3 %	しとやかな	13 人	21.7 %
振袖	4	6.7	優美・優雅な	9	15.0
祭・盆踊り	3	5.0	高級・高価な	7	11.7
正装	2	3.3	不自由な（動き）	6	10.0
黒髪	1	1.7	日本的な	5	8.3
			上品な	3	5.0
			古風な	2	3.3
	15 人	25 %		45 人	75 %

男子では名詞で「昔の衣服」（19.6%）、「祭・盆踊り」（13.0%）「時代劇」（10.9%）、以下成人式、正装と続く。形容詞では「日本的な」「優美・優雅な」が共に15.2%、「しとやかな」（13.0%）「上品な」（6.6%）であった。名詞と形容詞は同一割合である。

女子では名詞で「特別な衣服」（8.3%）、「振袖」（6.7%）、「祭・盆踊り」（5.0%）

となり、形容詞では「しとやかな」（21.7%）、「優美・優雅な」（15%）「高級・高価な」（11.7%）「動きが不自由な」（10%）、以下日本的な、上品な、古風などと続く。女子においては名詞よりも形容詞がかなり多い割合を占めている。

男女を比較すると女子の方が上げられた言葉の数が多く、特に形容詞では著しく多い。この

理由は男子より調査対象人数が多いせいもあるが、着用経験や関心の差があらわれたためだと考えられる。女子では経験などのせいか「高級・高価な」「動きが不自由な」も上がっている。

全体としては祝・祭など特別な時の衣服で、しとやかな、優美な、日本的なイメージをもっていることが明らかになった。

第二の調査は表3に示したように五組の対語からそれぞれ一つを選択するものである。男子では晴着、着装は困難、非活動的、非経済的、古典的と回答した人は96%であとの4%は経済性、着装で不明と回答していた。女子では晴着、着装は困難、非活動的、非経済的、古典的と回答した割合は100%であった。着装経験や関心の差が男女差として現われているように思われるが、この調査をまとめると、大学生(若者)は和服に対し晴着であり、着装はむつかしく、非活動的で高価というマイナスイメージをもっていることがわかった。

二つの調査をまとめると、大学生は和服に対し、特別な時の衣服であり、しとやかで優美で日本的な印象をもつものの、一方で着装はむつかしく高価であり、非活動的というふだんの生活からかけ離れた印象をもっていることが明らかになった。

#### 4. 2 和服の製作・着用経験・着用能力について

「被服構成実習Ⅲ」の受講生を対象に中学校、高等学校家庭科においての和服製作経験とその内容について調査した。その結果を表7に示した。和服に関連した講義及び製作実習を経験している人は全体の30%で、講義だけ聞いたのは10%で、全く経験なしは60%と高かった。講義

表7 和服製作経験

内 容	人数(人)	割合(%)
講義及び製作実習	6	30
講義聴講	2	10
どちらも無し	12	60

\* 女物ゆかた

だけ聞いたのは沖縄以外の他府県出身者で、製作実習は諸事情で中止になったということである。経験者は30%と少ないものの、いづれも高等学校の家庭科で、ゆかた(女物)を製作していた。

和服の着用経験(複数回答)の結果を表8に示した。「行事・祝等で晴着を着た」(70%)

表8 和服着用経験(複数回答)

内 容	人数(人)	割合(%)
祝・行事等で晴着を着た	14	70
祭・盆踊りでゆかたを着た	7	35
家庭科の授業でゆかたを着た	3	15
和服を着たことは全くない	6	30

で最も多く、「祭・盆踊りで浴衣を着た」(35%)「高等学校の家庭科の授業で浴衣を着た」(15%)となり、「全く経験なし」も(30%)である。家庭科の授業で着ているのは家庭科コース出身の学生で「被服」の授業でゆかたを製作し着つけも習っていた。筆者が県内の高等学校の教師を通して製作の実情を調べたところ、手縫いのみでさせていほぼ40時間かかっていることがわかっている。着つけは他領域の時間を使ってやっている状況であった。

和服着用能力を調べた結果は表9に示すとおりである。「晴着を自分で着ることができる」

表9 和服着用能力

内 容	人数(人)	割合(%)
晴着を自分で着ることができる	0	0
普段着(ゆかた等)を自分で着ることができる	7	35
全く自分で着ることはできない	13	65

は当然ながら一人もいない。「普段着を自分で着ることができる」は7人(35%)で、「どれも自分で着ることはできない」が13人(65%)であった。表8でみたように晴着を着た経験はあっても他人に着せてもらっているのでは着る能力にはつながらない。ゆかたのような簡単な和服を入門書を見ながらでも機会をつくって自分で着ることが重要であろう。

#### 4. 3 和服に関する基礎的知識の理解

和服に関する基礎的知識をどの程度もっているかを知るために簡単な試験(表4)を実習前と後に実施した。その結果を表10, 11, 12に示す。表10は女物ゆかたの各部の名称の理解度で製作実習前は、身丈、衿、袖丈、衤幅、肩当、共衿など理解している割合は低い(20%程度)が、製作実習後はどの部位でも85%以上に上昇していることがわかる。身丈、袖丈、おくみ幅、肩当、居敷当、共衿等は全ての学生に理解されていた。いちばん低いのは袂(たもと)でこの言葉は若者のみならず中年世代でもなじみのない言葉であるためであると考え。肩当、いしき当では、肩当は高等学校の製作の時つけている人は多いがいしき当は省略されているので全員実習前にはできていない。今回の「被服構成実習Ⅲ」では肩当、いしきあて共つくる段階でミシン縫いをとり入れ(時間の短縮化のため)、両方とも省略せず付けたので、実習後のテスト

では全員理解していた。浴衣地の布幅と総丈についての結果は表11に示している。布幅については5人(25%), 総丈1人(5%)しか実習前には理解していなかったが、実習後どちらも全員理解することができた。これは自分の反物を計測して寸法表に記入していること、そして隣の友人の布についても聞いたりしているうち、理解することにつながったと考える。浴衣の製作に必要な採寸箇所の理解を表12に示している。製作実習前は身丈と衿をわずかな人(3人)が理解していただけで、のこり多数は覚えてなかったが、実習後にはほとんどの学生が3つの採寸箇所を理解することができた。以上をまとめると高等学校でゆかたの製作を経験している人は30%いるが、和服に関する基礎的知識の定着は低い。しかし大学3年次になって初めて又は再度経験することにより、基礎的知識を理解することができたと考え。

表10 浴衣(女物ひとえ長着)の各部の名称理解度

	各部の名称	製作前		製作後	
		人	%	人	%
1	身丈	4	20	20	100
2	衿(ゆき)	2	10	19	95
3	袖丈	3	15	20	100
4	袂(たもと)	0	0	17	85
5	身八つ口	0	0	18	90
6	合妻幅	0	0	18	90
7	衤幅	2	10	20	100
8	肩当	2	10	20	100
9	居敷当	0	0	20	100
10	共衿	3	15	20	100

表11 浴衣地(反物)の布幅と総丈の理解

項目	製作前		製作後	
	人	%	人	%
布幅	5	25	20	100
総丈	1	5	20	100

表12 浴衣製作に必要な採寸箇所の理解

採寸箇所	製作前		製作後	
	人	%	人	%
身丈	3	15	20	100
衿丈	3	15	20	100
腰囲	0	0	19	95

#### 4. 4 家庭科教育における和服製作の必要性

家庭科教育における和服製作の必要性を中学校、高等学校、大学、その他で調査した。

その結果を表13に示す。中学校の技術・家庭の中でと回答した人は一人もいなかった。高等学校家庭科でが8人(40%)、大学の家政教育でが10人(50%)で、その他は2人(10%)であった。高等学校でと回答した人にどのような形でとり入れると良いかを聞いたところ選択科目「被服」の中でと回答した。大学でと回答した学生は、自分が教育学部所属で現状が選択科目であるせいか選択の形でとらせるとよいと回答していた。これらのことから現状を考えて、高等学校及び大学で、和服製作は選択という形で履修させるのが現実的な方法だと考える。

表13 家庭科教育における和服製作の必要性

教育段階	人数(人)	割合(%)
中学校 技術・家庭	0	0
高等学校 家庭	8	40
大学(四年制・短期) 家庭科	10	50
その他(専門学校・カルチャースクール)	2	10

#### 4. 5 「被服構成実習Ⅲ」におけるゆかた製作実習終了後の感想

実習終了後の感想を下記に示す。

M・S(平成7年度受講生)

私は高校時代ゆかたを縫っていないので今回初めて挑戦した。不器用なので手縫いには苦勞したがミシン縫いをとり入れたので何とか一週間(時間は少しオーバーした)で仕上げること



写真1 手さげ  
昭和初期の和服からの  
リフォーム  
(筆者 作成)

ができた。着つけも実習で習ったので何とか自分で着られるようになった。一年に一回でも着ないと忘れそうなので今後毎年着たいと思う。先生に見せてもらった手さげをみると和服はほとんどどれも長方形になるのでいろんなものにリフォームできる。和服は経済的だと改めて思った。 注\*写真1

S・N(平成8年度受講生)

今回初めて浴衣を縫った。以前から一度縫ってみたいと思っていたのでそういう機会がもててよかった。ゆかたの各部の名称がわかるようになり和服に関しても興味がでてきた。ゆかたは裁断する所が少なく直線で縫い合わせるのので洋服とは違っている。洋服の場合タックをとったりダーツをとったりして体のラインに合わせるのだが、ゆかたは出来上がったものを自分の体に合わせて着る方法なので何のくびれもなく直線的である。このことから体型が少し変わっても着れるので一枚もっていると一生ものだと思った。

Y・K(平成8年度受講生)

浴衣をつくったのは今回が初めてだったので不安でしたがだんだんと要領がわかり楽しくつくることができました。ミシン縫いをとり入れたため早くつくることができたのですが手縫いでやった方がきれいに仕上がることもわかりました。来年以降夏祭りでは着るようにします。

K・S(平成9年度受講生)

浴衣は思っていたよりも難しかった。でも次第に形になっていく浴衣をみると早く仕上げたいと思うようになり楽しく製作できました。縫いながら洋服と比較すると洋服のように布地を

写真2 平成9年度着つけ実習後



切りおとしたり、はぎれが多くでないですむので和服は布を無駄にせず、ほどくと元の布地の長方形に戻ることがわかった。今は反物が高くて浴衣はぜいたく品であるが、本人以外の人も着用することができるし、はずして他のものにリフォームもできるので改めて和服はすばらしいと思う。

K・M (平成9年受講生)

浴衣をつくるのは初めてで、衿つけのところがいちばん難しく手こずったけど、作るのは楽しかった。和服はほどくと長方形の布になるというのが今回の実習でよくわかった。布をムダなく使っていて端切れがでないというのも実際に自分で製作してみて納得できた。今回の実習

では着つけに帯結びも3種類学ぶことができ、将来教師になった時役に立つと思う。機会があればもう一枚作ってみたいと思う。

以上の感想を分析すると次のような事が明らかになる。

- ①ミシン縫いを取り入れたため、手縫いだけより時間の短縮がみられ、適当な日程(1週間)と時間(35時間程度)で製作できることがわかった。
- ②ゆかたは和服の一つであるが同時に平面構成の被服の一つでもあり、ひもをつかって体に合わせていく、このことも実習、着つけから学生は理解することができた。
- ③ゆかたは裁断で洋服のように切りおとしこと

写真3



写真4



写真5



写真6



写真7



写真8



はせず無駄がないこと、製作されたものをほどくと長方形になりリフォームしやすい、従って経済的であることも理解している。

④着つけ、帯結びの実習も加えることによりゆかたに対する関心とこれから着たいという生活への活用も充分ではないが達成されたように思われる。

#### 4. 6 ゆかたの入門書の検討

①「ことしの夏は2人でゆかた一縫える、着られる、買える」<sup>9)</sup> 1992年

身長による体型をL (163cm) M (158cm) S (153cm) と三体型で仕立て上がり寸法が示されているので、大～小どの体型でも使えることがわかった。製作手順は布地の見積り、印つけ、袖づくり、身頃縫い、衿、袖つけと伝統的な和裁の教科書とほぼ同一手順であった。

縫い方ではミシン縫いを取り入れてもよいと記述してあるが、具体的にどこでという表示がなかった。肩当、居敷当については、図も説明も全くない。着つけと帯結び、たたみ方については写真で示しているので初心者には理解しやすい。

②「NHKおしゃれ工房 (1995年6月号) ミシンで縫うゆかた」<sup>10)</sup>

身長による体型をL (165cm) M (160cm) の2体型で、これはLを161～165cm、Mを153～160cmと範囲で示していて、この2体型に合う仕立て上がり寸法が表示されている。これを見ると153cm以下のSサイズへの対応が不十分である。製作手順でも印付け、袖、背縫い、衿下、衽縫い、衿つけ、袖つけ、脇縫い、裾と従来の方法とは大きく異っている。そしてほとんどミシン縫いで仕上げるような方法にしているのは時間の短縮化を主眼にしていると理解される。肩当て、居敷当、かんぬき止めについては図も説明ともない。着つけ帯結びについては写真入りで説明している。

③「家族一緒の手作りゆかた」<sup>11)</sup> 1996年

ゆかた、甚平、作務衣、共布でつくる小物、着つけ帯結びと幅広く扱っている。仕立て上がり寸法についてもL (165cm) M (160cm) S (155cm) の三つの体型別に表示されているが、これ以下の身長の人への対応はない。不十分である。製作手順は従来からの方法に近似しているものの、一部は異なった方法となっている。作り方ではかなりの部分 (6ヶ所) でミシン縫いとなっているため短時間仕上げをねらって編さんされたものであることがわかる。肩当、居敷当については図・説明ともなかったが、かんぬき止めについての説明はあった。着つけは写真で表現されていてわかりやすい。

④「家族みんなの手作りゆかた」<sup>12)</sup> 1996年

子供ゆかた、成人女子・男子用ゆかた、甚平、のこり布でできる小物、着つけ帯結び、ゆかたの洗い方と幅広く扱っている。仕立て上がり寸法についてもL (163cm) M (158cm) S (153cm) とどのタイプにも対応できる。製作手順は、一週間でできるをうたっているせいか、一週間の一日ずつの製作内容が書いてある。縫い方でも一週間で仕上げるのを念頭において多くミシン縫いが入っていた。居敷当については作り方つけ方とも図示して説明しているが、肩当についての説明はない。かんぬき止めについては、身八つ口とまりを止めるとだけ記載されていて、名称方法ともない。名称と方法をのせてほしかった。着つけ帯結び、ゆかた用髪型についても写真入りで説明しているため理解しやすい表示である。

⑤「ぶきっちゃんさんのソーイングレッスン④ゆかた」<sup>13)</sup> 1997年

仕立て上がり寸法はL (163cm) M (158cm) S (153cm) とどの体型のもあり多くの人に対応できる。製作手順では、身頃が先で背縫い、おくみ付け、衿、袖つけ、脇縫い、袖づくり、裾の順で、従来からの方法からは大きく変化している。そして多くの部分でミシン縫いを取り入れているため、短時間 (短時間) 仕上げを目

標としていることがわかる。肩当，居敷当についての説明は全くない。かんぬき止めについては図を示して説明があった。着つけ帯結びはイラスト入りで説明されているのでわかりやすくなっている。内容は成人男女のゆかたを扱っていた。

⑥「ゆかたと和装小物」female 1997年7月号<sup>14)</sup>

月刊誌の一部であるせいか，ゆかたの名称，採寸，仕立て上がり寸法表および用具で1ページ，材料と裁ち方縫い方で2ページと扱いは簡単である。仕立て上がり寸法はL（165cm）M（160cm）S（155cm）と3体型対応である。

製作手順では背縫，前端的始末，衽つけ，共衿付（衿に），衿つけ，脇縫い，袖，裾の始末となっていて，従来の方法からはかなりはずれている。肩当，居敷当については両方とも省略されている。かんぬき止めについての説明はあった。たたみ方はあるが，着つけ帯結びの写真も説明も全くなかった。和装小物として巾着のつくり方は載っていた。

以上6冊についてまとめると近年のゆかたの入門書は写真，2～3色入り図を使うなど初心者の理解を助けるような工夫がなされている。単行本と比較して月刊誌の方は仕立て上がり寸法用の体型の少ないのが目立つ。そして製作手順も従来の方法から大きく変化している。縫い方はミシン縫いを多くとり入れ時間の短縮化をはかっている。肩当，居敷当などは省略され全体として簡単仕上げの衣服の印象が強い。着付け帯結びは紙面の扱い方で決まり省略されているのもあった。

単行本では仕立て上がり寸法の体型も3つ上げられていてほしいの人に合わせることができる。手順も従来の方法と同一だったり，少し変化させたりしている。縫い方は上と同様ミシン縫いを多く取り入れて時間の短縮化をはかっていた。肩当，居敷当は省略している。着つけ帯結びでは写真イラスト等をつかいわかりやす

く説明している。

以上のことから，単行本は肩当，居敷当等が省略されているのが欠点であるため，それらを補足すれば授業用参考書として使えると考えられる。

## 5 まとめ

我国の伝統的生活文化としての和服を今日理解させることはなかなか困難である。本研究では和服理解の一助として「被服構成実習Ⅲ」の授業を通して以下に示すような実践を試みた。

大学生男女を対象に和服のイメージ調査，「被服構成実習Ⅲ」の実習前後の和服に関する基礎的知識の理解度の調査，和服製作経験，和服着用経験および着用能力調査，家庭科教育における和服製作に対する意識調査，実習後の感想の分析等を行なった。さらに近年出版されたゆかたの入門書についても分析を行ない授業用参考書としての考察を加えた。その結果，以下のことが明らかになった。

1. 大学生の和服に対するイメージは男女で多少の差はみられるものの全体として祭や祝，行事等特別な時の衣服であり，しとやかな，優美・優雅な，日本的な印象を感じている。晴着であり着装はむつかしく非活動的，非経済的，古典的というマイナスイメージをもつこともわかった。
2. 和服の製作経験は30%と少なく，製作は高等学校の家庭科で行われたものであった。着用経験は祝・行事等で晴着を着る経験が70%と多く，祭・盆踊りで浴衣を着るは35%であった。家庭科の授業で着つけを習った折りに着たのが15%でのこり30%は全く経験がない。着用能力をみると浴衣程度なら自分で着ることができると回答したのは35%の人で，のこり65%は全く自分で着ることのできない状況が明らかになった。

和服に関する基礎的知識の理解では，ゆかたの各部の名称，着尺用反物の布幅と総丈，浴衣の製作に必要な採寸箇所等の理解度を実習前後で実施し比較検討した。製作

実習前にはわずかしか名称を正答できなかったが、製作後にはほぼ90%以上正答することができた。反物の幅と総丈、製作に必要な採寸箇所についても同様であり、製作実習・試験が和服の基礎的知識の理解に役立っていることが明らかになった。

3. 中学校から大学までの家庭科教育の中で和服製作をとり入れるべきかの意識調査では、40%の学生が高等学校の家庭科でと回答し、50%の学生は大学の家政教育でと回答している。それらの学生は選択科目でやるとよいと回答し、また製作するだけでなく着つけも教えるべきだと回答していた。
4. 実習後に提出させた感想の中では、ミシン縫いも取り入れることにより目標の日程時間（1週間35時間程度）で完成できたこと、和服はほどくと長方形の布になり無駄がなく（経済的）リフォームによって再利用できる。着つけを習うことにより今後の生活に役立つ等和服の長所を学ぶことができ和服の理解につながったと考えられる。
5. 近年発行されたゆかたの入門書（月刊誌の特集を含む）を検討した。身長による体型L, M, Sの三体型に対応したでき上がり寸法が提示された本は多かったが、中にはLとMのみの本もみられた。製作手順は従来からの教科書等に添ったものもあれば、そうでないものもみられ、雑誌では変化していた。製作方法は、従来の手縫いから、ミシン縫いを加えた方法にかわり時間の短縮化は可能になったが衿のような曲線部分は初心者にはうまくできないこともわかった。ミシン縫いは省力化につながるので、適当な時間で完成させるには必要なものであろう。肩当、居敷当についてはほとんどの本で省略されていた。高校生レベルではどちらかを省略してもよいが、大学生の製作では削ることはできないと考える。そういう意味から、肩当、居敷当をプリントなどで補足すれば、単行本ででている入門書のうち何冊かは授業用参考書として使用することが可能であると考えられる。

## 6 引用及び参考文献

- 1) 朝日新聞 1995年7月21日付(夕刊)
- 2) " 1995年7月30日付
- 3) 琉球新報 1996年7月17日付(夕刊)
- 4) 阿部栄子・大村寧「ゆかた地の地直しに関する研究(第1報)ー地直しによる布の基本的力学特性の変化ー」日本衣服学会誌第29巻2号(1986年)
- 5) 阿部栄子・大村寧「ゆかた地の地直しに関する研究(第2報)ー地直しによる布の外観特性の変化ー」日本衣服学会誌第30巻1号(1986年)
- 6) 阿部栄子「ゆかた地の地直しに関する研究(第3報)ー着用によりゆかたの布面にみられる残留ひずみの地直し処理効果ー」日本衣服学会誌第31巻2号(1988年)
- 7) 城真理子・内田恵美子・幡野暁子「和服文化の伝承媒体としてゆかたを考える」日本家政学会第49回大会研究発表要旨集P232(1997年)
- 8) 京都新聞 伝統文化に関するアンケート調査 1997年3月11日付
- 9) 「ことしの夏は2人でゆかたー縫える、着られる、買える」雄鶏社(1992年)
- 10) 「NHKおしゃれ工房・ーミシンで縫うゆかた」(1995年6月号)
- 11) 「家族一緒の手作りゆかた」ブティック社(1996年)
- 12) 「家族みんなの手作りゆかた」主婦と生活社(1996年)
- 13) 「ぶきっちょさんのソーイングレッスン⑭ ゆかた」雄鶏社(1997年)
- 14) 「ゆかたと和装小物」female 1997年7月号(1997年)
- 15) 滝沢和子「和裁 ひとえの着物」永岡書店(昭和54年)
- 16) 植田啓司・坪郷英彦 「生活文化論」源流社(1993年)